

曇天の空から染み出た雨が、ぱらぱらと零れ始めた。

硬い土の地面には、確かに馬車が走った跡が続いている。先行させたみんながひとまず無事であると確認し、ネックとノランは、早足で街道を行った。

北へ十五分ほど進んで小高い丘に出ると、岩山に沿って立ち並ぶ建造物が見えた。ところどころに自生する植物の緑が映えている。密集する建物の数は十や二十では利かず、当然ながら『アリーベの村』とは比較にならないほど発展している。

崖状の土地に作られたその街の名は、『マーデル・プラッタ』。

一行が目指していた、目的地である。

「二人とも！」

丘を下って少し行くと、街への入り口でもある檜の木の下にいたりアムとノアが、ネックとノランの元へ駆けつけた。

その脇には馬車が停まっている。

リアムはネックとノランを交互に見て、

「怪我してない？ あれ邪獣でしょう？」

「余裕よ」と、ノランは親指を立てた。

「大丈夫だよ、ほら」

ネックは両手を広げたり背中を見せたりして、無傷であることをリアムにアピールした。

「そう、よかった……！」

リアムとノアは、胸を撫で下ろした。

「そっちはどうだ？」と、ネック。

「平気。あれからまっすぐ街に着けたよ」

リアムを見た後、ネックが「ノアも大丈夫か？」と優しげに聞いた。

ノアも「うん」と頷く。

「そうか。よかった」

ネックは、馬車の傍らにいる御者に感謝を伝えた。

「でも、本当に邪獣がいたなんて……」

リアムが不安げに口に手を当てる。

「本当、珍しいこともあるもんだよな」

リアムの不安をよそにノランはあっけらかんと答えた。

「どっから来たんだろうな」

三人の言う通り、その名前こそ広く知られてはいるものの、このフィルスト大陸においては、邪獣というのはそうそう出くわすものではない。普通に暮らしていて出会うというのは、それこそ雷に打たれるくらいの確率とっていいだろう。

非常に獰猛で、人を見れば無差別に襲い掛かるといふ、邪気に満ちた獣……邪獣。

「もう二度と会いたくないもんだぜ」

「……そうだな」

「もう、無茶だけはしないでよ？」

三人の会話を聞きながら、ノアは誰にも聞こえない声量で、「じゃじゅう……」と呟いた。